The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「万の文反古」における一つの問題
Author(s)	鈴木, 亨
Citation	語文. 1965, 25, p. 69-74
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68564
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「万の文反古」における一つの問題

鈴木亨

一

「万の文反古」を読んでいて気付いた一つの事柄から、この作品における西鶴の批判的精神を考察し、併せて西鶴の貧窮観といったような問題にまでふれてみたい。

巻一ノ三「百三十里の所を拾匁の無心」と巻二ノ三「京にも思ふやう成事なし」とは非常によく似た事情の下に書かれた書簡である。巻一ノ三の書簡の筆者江戸白かね町在住源右衛門は、元大坂にいたが、酒のために身代を取り乱し、兄を始め種類の忠告も聞かずに江戸に下り、一旗挙げようと企んだ男、巻二ノ三の書簡の筆者島屋九平次は、昔仙台にいたが、女房を嫌って家を飛び出し、京で一旗挙げようと謀った男である。ところが共に事志に反し、ひどい窮迫状態に陥る。そういう状況の下にそれぞれの故郷の縁者にあてて書いたのが、この二通の書簡である。

この二篇は共に名作の誉高いもので、暉峻康隆氏も「この種の作品の中で、文学的にもっとも成功した作品」と賞揚されている。[1] ところがこの両者の書簡は、その筆者の態度において全く対蹠的である。これは偶然そうなっているのかも知れないが、以下に考察する様々の対照を考えてみると、西鶴自身が、殆ど同一の状況における違った生き方を描くために創作した、いわばペアをなす二篇ではないかと思われるのである。

源右衛門の手紙は目下の窮状を切々と訴え、かつて背いた兄に対してひたすら慈悲を乞い、救援を求めているに対して、九平次の手紙は、自分の惨憺たる失敗をむしろコミックに報ずると共に、このように拙い自分をこれ限りどうぞ見棄ててほしいと願い、「かさねては書中にても申上まじく候」と永遠の別れを告げている。技巧確かなストーリー・テラーである西鶴は、この両者の態度をより鮮明なものとするために、ぬからず効果的な背景を添えている。即ち、救援を求める源右衛門の方には、援助の手を差しのべるべき兄源五左衛門が、近年すっかり没落して屋敷も売り払い、長町に引込んで判じ物の団扇屋をやって細々と暮しを立てている状況を添えている。それに対し、永遠の別れを告げる九平次の方には、家を出て十七年の間、三度も暇の状を遣したにも拘らず、依然として夫の帰郷を信じて待っている実直な妻と、それを手厚く保護している立派な舅とを配している。救援を求める側には援助どころではない事情を設定し、別れを告げる側には喜んで迎え取ろうとする故郷の家を設定し

ているのである。これは単に運命の皮肉を話の興味のために添えたのではない。それにも拘らず、故郷に帰るための最低路銀だけでもよいから送ってほしいとせがむ弟の「一日も爰元に居申す程かつへ申候」という脅迫的悲鳴のどぎつさ、一方またそれにも拘らず未練はさら〳〵ないと断言する夫の「我等死だ者分になされ御たづね御無用に候」という別離の言葉の潔さ、そんなものの表現効果を西鶴は狙ったのであろう。

生活苦のために死ぬかも知れない限界状況は両者に共通である。九平次も「若命ながらへ申候ば坊主罷成執行にくだり可申候」とか、「其日ぐらしに扨も死れぬうき世に御座候」とかいっている。坊主といえば源右衛門も、「たとへ鉢開き坊主罷成候とも大坂の土に成申度願ひに御座候」といっているが、路銀の請求をするぐらいだからこれは口先だけで、実際に托鉢旅行をする程の覚悟のない事は見えすいている。

西鶴は「文反古」を「世々のかしこき人のつくりおかれし諸々の書物」とは違って、人の為になるような作品ではない、たゞ「其身の恥」を見探すだけだと称している。[2] 即ち何の理想も、随って何の批判もなしに、人生の恥多い真相を客観的に描くのだと称しているわけである。実際、書簡という元来非公開的な性質のものを、そのまゝの形で読者の前に投げ出すというこの書のスタイルは、そういう作者の意図にふさわしいものであったろう。そも〳〵書簡体小説というスタイルにそういう効用を発見した所に、在来の艶書小説の類を超脱したこの作品の成功の因があるともいえる。だから我々も何らかの価値体系や道徳的観念を先入観として持つ事なく、とにかく白紙のヒューマニズムでこれを受けとめてみることが大切である。それは今更いうまでもなく、従来からそうされて来た。その代表的な受容の例として、再び暉峻氏の鑑賞を引用してみよう。[3]

「百三十里の所を拾匁の無心」は――（中略）。そこでいかに力およばぬ転落の過程を語り、いかにみじめに誠実を誓ってゐることか。（中略）だがこゝにはまだ、一筋の藁をつかまうとするあがきがある。誇も愛情もすてて絶望から必死になって脱走しようとする人間の思ひつめた表情がある。美意識やモラルの批判をよせつけない、この絶対絶命の表情が人を打つのである。ところが「京にも思ふやうなる事なし」の一篇になると、もはやあがく力さへ失った絶望的な人間のたたずまひを描かうとしてゐるもののごとくである。（中略）一さい合さいさらけ出し、自分を人生につなぎとめてゐる最後の一本の綱をぷっつり断ち切って、さぞさばさばとしたことであらう。〈もし命ながらへ申候ば坊主罷成執行にくだり可申候〉といふ結びの一節も、さういふ放れ切った心境を、じつに適確につたへてゐる。したがってこゝには、前作のあの思ひつめた表情はない。しかしながらこの、自分のなしつつある行為の美しさを知らず、最後の便りをせっせと書きつづける、芥のごとくみじめな男を愛さずにはをられない。

しかし、今少し考察を進めてみると、果してこのように無条件に、両者の生き方を平等に肯定する受容が正しいか否かに疑問が生ずる。作者はそういう等しい同情共感を読者に要求しているのであろうか。この二通の書簡を比較してみると、そこには案外はっきりとした西鶴の批判を見ることができるように思う。更に端的に言うならば、この両篇の書簡の筆者の態度については、かなり露骨に好悪の情が示されているのではないかということである。

源右衛門の手紙は一見して嫌らしさに満ちている。若気の野心や仕事の失敗はこの作者は問わない。たゞ失敗を不可抗的なものとする弁明、くど〳〵とした窮状の訴え、算用ずくでしたと称する結婚の話、そして自分一身が助かるために妻子を置き去りにしようと謀る恐るべきエゴイズム、しかもそれを相手の負担を軽減するためとする道徳的偽装、こういう唾棄すべきものを作者は執拗なまでに読者の前に積み重ねて見せるのである。「なほ〳〵爰元にて持申候女房、わたくし浮気にて持ち申さず候證拠には、我等より十二三も年寄にて御座候。萬事此清左衛門殿御物語、御聞きなされくださるべく候以上」末尾の末尾に至るまでのこういう調子に辟易しない読者は少ないであろう。

それに反し九平次の手紙には、豊かなユーモアとペーソス、それに何よりもほの〴〵とした愛の暖かみが感じられる。妻にはみじんも心残らずと言いながら、十七年間空閨を守った妻を思う心は切である。それは十七年間に二十三度も結婚し、その悉くに失敗するという物語の背景になっているだけに印象も強烈である。その妻に「いまだ若いうちにかたづき候が其身のためとぞんじ候一たびかたらひをなし候事なればあしかれとはぞんぜず候」と思いやる心には一片の利己心もない純な慕情が感じられる。本当に飽きた妻ならそんな事はどうでもよい筈である。「夫婦はよりあい過とぞんじ候今の身にくらべてはむかしの仙台の住所ましと存候」という言葉にも、彼の心の底に秘めた燃えるような懐郷の念が窺えるようである。

九平次は自分の心を「いよ〳〵此むごき心底」などとひどく罵っている。源右衛門が最近はすっかり心も入り替り、酒も一滴も飲まず、律儀になったと力説し立証しようとするのとは対照的である。しかし読者はこの各〻の自己評価をすなおにそのまゝ受け入れはしないであろう。全く逆にして両者に当てはめねば気がすまないであろう。こゝにも作者の深い計算が感じられる。作者はこの作品においては、このような形でその批判を語っているのである。

二

以上のように考えてくると、この両篇を一対の緊密に構成された姉妹篇として比較鑑賞するという事は、作者の希望するところであるか否かは別として、すくなくともその創作意図を誤らない、むしろそれを鮮明にする読み方であるといえるだろう。

それにしても、こんなにもみごとな対照の例は一寸他に見当らないような気がする。またこんなにも明瞭な好悪が示されている例も見当らないような気がする。西鶴はしば〳〵人生の勝利者と共に敗北者を描いた。そしてこの国の多くの作者がそうであるように、敗北者に対して十分に同情的である。貧窮は富裕の対極として、既に「好色一代男」以来、好色物町人物を通じて頻出する主題である。彼はある場合には好色や贅沢や不才覚や不道徳の結果として、懲罰的に貧窮を描く。またある場合には人間の才覚や努力に拘わらず、たゞ非運にして脱出し得ない貧窮を描く。ある者はその中にあって悲しみ歎き、あるいは必死のあがきを見せる。又ある者は諦めの境地に生き、時には自嘲する者もあり、多くはたゞその日を送るに汲々としている。これらの殆どの場合に西鶴は冷徹な観察と共に暖い共感を寄せている。

西鶴は近松に比して冷酷なリアリストのようにいわれるのが常だが、事貧窮に関する限り彼は同情的である。「まことに世の中の哀

れを見ること貧家の辺りの小質屋、心よはくてはならぬ事なり。脇から見るさへ悲しきことの数々なる年のくれにぞありける」（「世間胸算用」巻一ノ二「長刀はむかしの鞘」）これに類する同情の言葉は度々出てくるし、描写叙述の中におのずとその気持をこめている例は更に多い。あがきの余り道徳的に逸脱する場合ですら殆ど例外ではない。右の「長刀はむかしの鞘」に登場する浪人の女房のゆすりについても、作者は、「扨も時世かな、此女もむかしは千二百石取たる人の息女、萬を花車にてくらせし身なれ共、今の貧につれて、無理なる事に人をねだるとは、身に覚てロおし。是を見るにも貧にては死れぬものぞかし」と同情に満ちた評を加えている。（致富の過程における不道徳の場合とそれは全く対照的である。例―「日本永代蔵巻三ノ三「世はぬき取の観音の眼」・巻四ノ四「茶の十徳も一度に皆」等）現世の裕福を祈るために、借銭までしてはる〳〵小夜の中山の無間の鐘をつきに行く愚かしさも、西鶴は一応は笑いものにしながらも、福果をもってこれに酬いている。（「永代蔵」巻三ノ五「紙子身袋の破れ時」）素材の暗さから思えば意外なほど明るいこれらの作品の秘密の一つは、こんなところにもあると思う。

そういう豊かな包容力をもって貧窮者に対した西鶴が、何故こゝにだけこのような厳しい批判を盛り込んだのか。これは恐らく次のような事情によるのではあるまいか。

必ずしも目録の順から推すわけではないが、「百三十里の所を拾匁の無心」の方が先に書かれたものであると考えるのは自然であると思う。これは西鶴が「永代蔵」でも「織留」でも描き、更に後の「胸算用」では一層集中的に描いた、貧の苦しみと、それから脱出せんとする凄絶なあがきとを主題としたものである。「文反古」の中でも巻一ノ一「世帯の大事は正月仕舞」などと共に、当然現るべくして現れた一篇であるといってよいであろう。

ところがこれを書いている間に、西鶴は妙に反撥するものを感じた。貧窮やあがきをのっぴきならぬ事態や行動として客観的に描くのでない、その一時点における心情を主として訴える形をとる書簡体小説の故に、その心情の薄汚なさ、卑劣さが露わに感じられたのかも知れない。既に「武家義理物語」のような境地を描いて来た作者のことである、幾ら貧窮者に同情を惜しまないといっても、さすがにこゝまでは許せぬ気がしたのではあるまいか。

これは作者にとっても一つの無視し難い心理的体験であった。そこでこの篇はその気持をそのまゝ持ち込んで徹底的な嫌らしさをこめて完成させ、その後で改めて殆ど同一の状況の下に、別個の心意気に生きる人間の物語を構想してみたのではないか。それが「京にも思ふやう成事なし」の一篇となるのである。だからこの書簡は思い切って清々しい心情が先に想定され、それを如何に効果的に表現するかが筋書決定の基本問題であったと思われる。救援を求めようとせぬ潔さが前作ともっとも対蹠的な点であるから、まずこれが中心となって諸々の効果的な事情が設定される。そしてこれは、故郷の妻に対する悪感情が持続されている状態では甚だ効果が減殺されるから、妻への慕情の復活は必然となる。作中再三それを暗に強調するのはそのためである。その復活のための筋書が二十三度の結婚失敗物語となるという具合である。こうして一篇はモデルがある場合よりも緊密に内面から構成されて行ったのである。私はこの二篇の成立をこのように想像する。

ところでこの慕情と別離の宣言をする気持とは、そのまゝでは両

立し難い心情である。辛うじてそれを両立させているのは、九平次のプライドであって、絶望や自棄ではない。ましてや疲労の余りの放心ではない。客観的には彼が故郷へ帰り得ない理由は何一つないのである。かゝる身の上と心境になっては、帰らない方がよほど不自然である。「是程悲しき身に罷成候へども其元の女にみぢんも心残らず候はよく〳〵の悪縁に候」と九平次も前後矛盾した無理な事を言っている。この言葉に関する限り、彼は己れに正直ではない。しかしそんな事を言い立ててまで己れのプライドを守ろうとするところに、読者は限りない悲しさと美しさを覚え、愛着を禁じ得ないのである。心の奥底に深く守られたそのものは、それと直接言い立てれば、それだけで忽ち淡雪のように消えてしまいかねないほどのはかないものである。そんなものを一身の破滅を賭けて守る美しさ、それは絶望的な敗北者にもたゞ一つ許された美しさである。

現実としては、こういう美しさにこだわっていてはそれこそ破滅を免れ難いことは西鶴もよく承知している。だからこそ作者は前述の如く貧窮者に対して温いのである。その点彼はあくまで観念的な道学者ではない。しかしそれにもかゝわらず一身に替えても守るべきものを持っている人間を作者はより深く愛していたに違いない。そういう人間の心情を純粋に主題の中心に据えて描いたのが、この九平次の書簡ではないかと思うのである。

こういうような主題は晩年の「置土産」において最も集中的に現れてくる。有名な巻二ノ二「人には棒振むし同前におもはれ」その他、悲壮にあるいは悠然と己れを持して生きて行く没落者を描いた諸篇には、哀愁をこえてたまらない魅力がある。更にそういう「置土産」の境地に近いものとして、「胸算用」の巻三ノ三「小判は寐姿の夢」を挙げることができよう。「それをきいてからはたとへ命がはて次第とかけ出し行て、女房取返して泪で年を取ける」という結末には、もはや一片の希望も残されていないが、守るべきものを守った安らぎが、悲しくも美しい余韻となっている。更にはずっと早い例であるが、一銭を乞う身の上であるのにどうせすたる黒髪を三百文とついに取り替えなかった女乞食の物語(「椀久一世の物語」上巻「袖乞ひなれど義理の姿」)などもある。

何でもかでも生きのびようとする人間の心は同情に値するし、そのたくましさに打たれる事もある。しかしそれ以上に高貴な破滅というものもある。西鶴は「胸算用」ではその前者を主として描き、「置土産」ではその後者を多く描いた。勿論これをもって直ちに作者の心境の推移を云々するのは危険かも知れない。「胸算用」と「置土産」とでは第一素材の質が異なるし、随って興味の中心も変ってくる。できるだけ同質の説話を揃えて、読者に集約的な感興をサービスしようとする浮世草子では、作者の微妙な心境の推移まではなか〳〵現れ難いと思われる。

しかし貧窮という現実に、たゞやたらに本能的に反応しているだけでは、その現実が厳しければ厳しいほど人間は絶望的な様相を呈してくる。同情や理解だけでは事態は如何ともし難い。そう考えた時に、西鶴の胸にもこの高貴な破滅が悲しいけれど究極の理想として浮び上ってきたのではないか。観念の展開の順序としては一応これが順当と思われる。しかしながらこれは不可逆なる推移ではない。右に挙げたように「永代蔵」などよりも早い「高貴な破滅」の例もあることなので、何度も彼はこの両様の観念の間を往復したに違いない。「胸算用」から「置土産」への道も、その往復の一軌跡であ

って、西鶴生涯の結論の方向を示すものとまで考える事はないであろう。それは「胸算用」に「小判は寐姿の夢」（巻三ノ三）、「置土産」に「子が親の勘当逆川をおよぐ」（巻三ノ二）というような、逆の立場に属しそうな例外的作品が見られることからも思われることである。

こういう晩年の図式と同じものが、ずっと小規模ではあるが純粋な形で早く現れたのが、件の「文反古」の二篇であるとはいえないだろうか。

遡って仮名草子時代、貧窮は清貧主義の教材としてか、単に致富の不快なる対極としてか、あるいは浮世房流の飄々たるすりきり者の笑話としてしか描かれる事はなかった。真に限界状況の中で如何に生きるかを真剣に追求する事はなかった。そういう事態が世間になかったのではない事は勿論である。唯々作者にそれだけの現実に肉迫する力量がなかっただけの事である。道学者流は貧窮を観念としてしか扱い得ず、すぐに許由・巣父と並べ論じた。自ら貧窮に身を置く者も、世を呪うか浮薄なる笑いに逃避するかのいずれかであった。貧窮の実質はついに西鶴の登場まで捉えられる事はなかったのである。

西鶴によって、貧窮は全く新しい、しかも重要な文学の主題となった。西鶴は金の文学の大成者であるといわれる。金の文学という言葉には、どうも「大福新長者教」の著者として、数々の致富譚に奇才を見せた彼の華かな面に比重がかゝり過ぎるような印象を受ける。むしろその裏面のみじめな貧窮譚の方にこそ、彼の最もすぐれた文学精神が発揮されている事を確認すべきであろう。（終）

注

1　西鶴―評論と研究―下巻
2　万の文反古序文
3　西鶴―評論と研究―下巻

（島根大学助教授）